

沖泊道（よづくはで）

現在は絵のように美しい田園に囲まれた静かな集落となっている西田は、かつて石見銀山と温泉津港および沖泊港を結ぶ宿場町として、重要な役割を担っていました。銀がこの道に沿って海岸まで運ばれたのは、16世紀後半の40年間のみでしたが、この道は1800年代後半まで、銀山との間の主要な物流経路となっていました。多くの人が行き交ったことで、西田の茶屋、宿場、酒場は繁栄し、定期的で開催される市場は近郊の村に住む人たちを惹きつけました。地元の人々は、商いの神様を祀り、集落の上端近くにある小さな聖地「上市恵比寿神社」で、これら市場の繁栄を祈願しました。火災から身を守るための祈りが、仏教における慈悲の菩薩である観音様に捧げられ、石を彫って作られた他の仏像が安全祈願のために、この道に沿って置かれました。これらすべての信仰の場所が現在も残っており、収穫した稲を天日で乾燥させる昔ながらの「ヨズクハデ」という伝統技法もまた然りです。西田ならではのこの風習は、地元の方言で「フクロウ」を意味する「ヨズク」という言葉にちなんで名づけられており、そこで使われる木杵がこの夜行性の鳥に似ていると言われているため、この言葉が使われています。